

人の能力を伸ばすための宗教教育である。

特色をいくつかあげると、全寮制を敷き、指導者と学林生が共に生活すること、一般の教師にも公開し、聴講制度を設け、生涯教育を扶助すること、宗門の教師候補生を同時に養成することにより教団内の団結力を高め、個人・寺院・教団の目指す方向性を統一すること等があげられる。カリキュラムは一年間で日蓮宗僧侶としての基本事項を修得できるように、声明・読経といった法要式部門はもちろんのこと、教化学概論・教団論・儀礼論・教育学・心理学・カウンセリング・教化実習等の教化学をはじめ、易学・ニューサイエンスといった一般学部門まで幅広い科目を自由に選択できるように設定し、応用力を高めることが可能となる。講師も研究者・実践者・一般人を按配し、多分野にわたる交流も積極的に企てる。また、立正大学や身延山大学とのカリキュラムの互換性を保つことも考慮されている。

こうした意見のように、これからの宗門子弟の養成は、従来の教育システムをより進化させたものでなければならず、信仰の基盤となる教養の修得、法儀の修得と寺院実務の研修はもとより、現代社会に対応し得る教化学と教化実践、一般学の習得といった現代社会の多元化に应答できる新しい試みが必要とされるのではあるまいか。

結び：仏教教育の現状と課題をめぐって

身延山大学学長 仲 澤 浩 祐

現代を特徴づけるものは、教育的側面からいえば、学歴社会と学校化社会である。高校教育においては、管理教育が増長し、偏差値教育を重視した輪切り選別教育が行われ、生徒たちは自らの意志に反し、不本意に各差づけられた大

学へと進学する状況となった。一方、高等教育機関への進学率の増大によって、いわゆる大学の大衆化が進んだ。この大衆化について、深山氏は、質的側面からとらえ、「大学・高等教育が広範な青年のものとなり、国民的アカデミズムが実現する可能性をもつもの」ととらえている。さらに70-90年代における高校のあり方を問い、自らの静岡大学、身延山大学での経験を紹介し、大学に進学してくる学生の実態を浮き彫りにした。いわゆる「考えない」学生気質ができあがり、無気力で主体性のない、万事につけて受動的な学生、不本意入学の学生が大学生として入学してきていることを指摘している。その上で、「教員は学生に学習と生活の主体者としてのあり方を修得させる責任を負っている。その点からして、小学校から高校までの教育の在り方にも積極的な意見・要請を提起する社会的責任をも同時に果たしていかなければならない」と問題を提起し、さらに国連が取り組んでいる「国連人権教育の10年」について、日本の宗教界の積極的な役割が期待され、“人権教育の徹底”こそが基本的に重要であると提言している。確かに日蓮宗では人権対策室を設けて、人権の問題に取り組んでいるが、仏教が「平等を説く宗教であることを標榜していることから、宗門子弟だけでなく広く積極的に「人権」そのものに焦点を当てて考え、検討し、「人間の尊厳」「自由」ということ、ひいては「生命の大切さ」を訴えていくことが必要である。今日のように、無雑作、無作為に人間の生命が奪われ、転倒の世界がますます深まり着実に人間の資質が低下してゆく中、伊藤瑞叡氏の言を借りれば、「現代社会はアノミー（無秩序状態）がますます深化し行く中、最も望まれるのは宗教教育、宗教情操教育である。」そこで、こうした状態にある学生を受け入れる大学側として、特に宗教教育を施す現場ではどうあるべきかということが問われることになるのであるが、伊藤氏は我々日蓮宗門人としての教育は、『智慧と慈悲』とを前提とした仏教教育の実践にあるという。つまりエミールが「自然人を社会人へと育成することが必要である」といっているように、仏教教育の目的も他人のために生きる人間としての

菩薩を育成していくことにあり、そのためには、「妙法」に従って一切衆生を菩薩へと教化することである。具体的には、三秘をもって戒・定・慧の三学に対応せしめ、身口意の三業を正しく整えることを基本としつつ学校、社会、家庭において教育実践がなされなければならないという。だが、私たちは多元化し、多様化し、個別化、孤立化、没社会化が進む中であって、科学万能の錯覚に陥り、現代の若者が抱えている不安や求めているものを見失っている。

この点、赤堀正明氏は次のようにいう。既成教団は現代の若者たちの要望を知ろうとしていない。若者が求める宗教は「可視的で束縛されず、個人単位で入信、脱退が自由にできる宗教であり、彼らの入信の動機は主として四つの喪失—体育・徳育の喪失、主体的積極性の喪失、超越のアイテムの喪失、宇宙モデルの喪失—にあり、これらは学校教育に欠落している。また近代仏教学による知識偏重、智慧軽視の教育は、僧侶の社会への適応の低下、社会に対する仏教的視点からの発言低下の最大要因となっている。」だから日蓮宗門の子弟教育には、学校教育と仏教教育とに欠落している点を組み込み、補完していく必要があるという。そして三秘を三学に対応せしめつつ、青少年を教育する方法として、体育的要素のあるもの（体を動かす楽しみ）、音楽的要素のあるもの（感動）、文学的要素のあるもの（見て考え、表現する）を教示していくことが必要であり、そのためにも青少年の要望を踏まえた教育実践がなされなければならないという。

さて伊藤氏は、仏教教育の究極の目的は「信と学とを規範とする自行としての自己教育と化他としての社会教育の両面において、淨佛国土と衆生皆成を達成することであり、そのためには聖なるものを仰ぎ、尊い人々にあやかろうとすることが必要である。」という。まさにここに仏教教育の根幹があるといえる。「聖なるものを仰ぎ、尊い人々にあやかろうとする」というこの情操こそが仏教教育に必要なのである。1966年、中央教育審議会は「期待される人間像」を発表したが、その中で『生命の根源すなわち聖なるものに対する「畏

敬の念」が真の宗教的情操であり、人間の尊厳と愛もそれに基づき、深い感謝の念もそこからわき、真の幸福もそれに基づく』と宗教的情操教育の基礎として「畏敬の念」を掲げている。つまり「聖なるものに対する畏敬の念」こそが宗教情操であるということにある。ところで価値のもつ意味によって情操は、道徳的情操、芸術的情操、科学的情操、宗教的情操に区分される。宗教的情操は「究極的絶対的な意味をもつ価値が志向されている場合、その価値と関わる情操をいう」(家塚武志「人間形成における宗教的情操教育の意義」-『宗教教育の理論と実際』日本宗教学会編、すずき出版、1985年、第一章第二節、25頁)。教育は人格の形成をめざすことにあるが、言葉を換えれば、情操豊かな人間性の実現にある。価値の創造は、誰にでも可能であり、日常生活において自他の生活に何らかの寄与ができれば、そこに価値の創造がある。逆境にあり、肉体的精神的な苦しみを克服しつつ生きていく生き方、たとえば、死期を知りつつその苦しみに堪えながら創造的に生きていることが価値そのものであり、さらにそのことが人々に大きな感動を与えるなら価値は増大する。この価値を持ったものに対して素直に感動できる心こそが豊かな情操なのであるが、「情操は精神発達段階と密接な関係をもち、ある一定段階にまで達しないと情操は発現しない。新生児ではたんに情緒だけしかないが、幼児期・児童期に移るに従って情緒は複雑に分化し、青年期にいたって初めて情操と名づくべき多くの感情が現れ、個人の精神生活の程度に従って発達が停顿したりさらに分化したりする」(『教育心理学事典』金子書房)という。したがって情操は個人の修養や教養の程度により著しい差を生じる。つまり人間は十人十色、それぞれの志向する価値はさまざまである。ある人にとって絶対的な究極的価値をもつものであっても、他の人にとってはあまりそれほど価値をもたないものもある。その点、伊藤氏が仏教教育を生涯教育ととらえ、幼少年、青少年、老荘年の三期にわたって三益化導の方法をもって教育することを提示していることは注目に値する。

また赤堀氏は、日蓮宗門の現状と問題点を分析し、宗門の子弟養成のプログラムの中核をなすものとして「仮称日蓮宗行学林」を提唱する。すなわち1)教師資格を得る以前、2)教師資格を得た時点、3)教師資格を得て以降の三期に分け、基本的コンセプトとして自主性を尊重し、教える側と教わる側とが互いに信頼を深め、できる限り対話に時間を割き、全人的な触れあいの中で信仰を深め、一人一人の能力を生かすための自由な研究時間をとるというものである。カリキュラムは教義の修得、法儀の修得と寺院実務の研修はもとより、現代社会に対応しうる教化学と教化実践、社会状況に相応するに必要と思われる一般学の修得をも含んで編成するものである。ここで一般学と呼んでいるものは易学・ニューサイエンス等といったもので、応用力を高めることを念頭に置いたものであるが、この行学林構想では、全寮制、聴講制度を導入することにより個人と寺院と教団との方向性を統一し、さらには相互の連帯感をもたしめ、日蓮教団の教育・修行を統合・体系化することをめざしている。確かに宗門の関係機関で行われている種々の講習会、講演会、研修会等は企画の段階から主催あるいは主管する側に任されているため、内容、日数、陣容、開催方法等一貫性を欠き、赤堀氏が指摘するように「基本方針」「指導者」「養成機関」いずれも宗門としてのアイデンティティーが欠けていることが知られる。

さて、立正大学も身延山大学もそれぞれ飯高檀林、西谷檀林に発し、仏教教育特に僧侶養成をも念頭に置いた教育機関として発展、展開してきたが、仏教系大学といえども、現行の文部省の設置基準に従って設立されている教育機関である。深山氏も指摘しているように、目的意識の希薄な主体性を欠いた学生たち、これは宗門子弟も例外ではないが、このような学生を前にして、どのように仏教教育行うか、具体的な教育施策を持ち考えていかなければならない。このことは常に変わらないことであるが、宗教情操教育が必要であることは、今や識者の多く語るところである。

戦後50年を経て、生活環境が激変し、生活様式は洋風化し、座の文化とい

われた日本の文化はどんどん省みられなくなっている。一方、先述したように、すべてが効率化、簡便化、省力化され、物の豊富な環境の中で育ってきた学生たち、さらにはメディア化が進む中であってヴァーチャルとリアルの区別がつかなくなりつつある若者・学生にどう対するか、また個を大切にし家や家意識からの解放と自立を求める傾向、いわば家族意識の変化が進む中で、生活活動をどう主体的にさせて行くか、今後の仏教教育・宗教情操教育に深く問われていることであろう。さらに子弟教育という点からいえば、如上のような社会環境の変化を踏まえて僧道教育のあり方、指導の仕方、方法等々一考することが必要となっているといえよう。伝統の存続は変革なしにあり得ないからである。

以上、『大学をとりまく社会環境と仏教教育』という表題の下に、三者の開陳・提示された問題点と課題を踏まえながら少しく付言を試みてきたが、最後に、広範な各氏の所論の整理、浄書を本学の三輪是法講師にお願いしたことを記して結びとしたい。